

アジア研究教育ユニット（世界展開力・特別経費）平成 28 年度教育研究報告書

事業課題名	非常勤講師任用 ビルマ語、タイ語、インドネシア語、ベトナム語
代表者名	玉田芳史
事業概要 (600 字程度)	<p>大学院アジア・アフリカ地域研究研究科は、東南アジア諸語科目として、平成 28 年度には、弓庭育子講師によるタイ語Ⅰ（初級）とタイ語Ⅱ（初級）、柏村彰夫講師によるインドネシア語Ⅰ（初級）とインドネシア語Ⅱ（初級）、本行沙織講師によるビルマ（ミャンマー）語Ⅰ（初級）とビルマ（ミャンマー）語Ⅱ（初級）、清水政明講師によるベトナム語Ⅰ（初級）とベトナム語Ⅱ（初級）を開講した。いずれも前期・後期各 15 コマずつの開講であった。タイ語Ⅲ（中級）、ラオス語Ⅰ（初級）、ラオス語Ⅱ（初級）は開講できなかった。</p> <p>ベトナム、タイ、ミャンマー、インドネシアを研究する場合には、それぞれの現地語の習得が不可欠である。日本研究に日本語が不可欠なのと同程度に必要性が高い。</p> <p>これらの言語のうち、インドネシア語はローマ字を用い、発音も難解ではない。それに対して、タイ語とビルマ語は独自の文字があり、タイ語とベトナム語は独自の声調があるため、習得が容易ではない。</p> <p>本事業は、必要性が高く、習得が容易ではない言語の教育を支援した。</p>
成果の概要 (800 字程度)	<p>東南アジアは日本との政治的経済的文化的な関係が強く、相互理解が不可欠である。しかし、日本の大学は欧米志向が強く、東南アジア理解に不可欠な東南アジア諸語の教育には冷ややかである。このため、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS)は全学経費からの助成を受け、さらに不足分をアジア研究教育ユニットからの助成によって補うことにより、東南アジア諸語科目を開講した。</p> <p>これらの語学科目は ASAFAS の学生を主たる対象としている。しかしながら、実際の受講生は他研究科院生や学部学生が少なくない。とりわけ多いのは、文学部や文学研究科の学生である。必ずしも履修登録を済ませたものばかりではなく、単位認定とは関係なく、自主的に熱心に学習する学生も少なくない。これらは、端的にいえば、全学向けの語学科目となっている。それにもかかわらず、京都大学はこうした語学科目の開講に冷ややかであり、非常勤講師を雇用するための経費が年々削減される傾向にある。そのため、ASAFAS は語学科目を十全には開講できず、一部の科目を不開講とせざるをえない状況にある。そうした苦境にあって、アジア研究教育ユニットからの費用補填はきわめて重要な意味を持っている。東南アジア諸語の教育にとっては命の水ともいえる役割を果たした。</p> <p>今日では大学生が企業に勤務したとき、派遣される海外とは、欧米よりもアジアである。日本企業は政治リスクゆえに比重を東アジアから東南アジアへと移し替えつつある。つまり、京都大学の卒業生が派遣される外国とは東南アジアである可能性が高まっている。東南アジアで商売をするには、英語では足りず、現地語の習得が望ましい。この意味で、本事業は京都大学が社会にとって有為な人材を生み出すのを助けておりきわめて重要である。</p>